22　「式部日記」和泉式部　─中古の日記

17年度　フェリス女学院大学

★　次の文章は、『和泉式部日記』の一節で、「女」（和泉式部）のもとへ通うことがしばらく遠のいていた「宮」（敦道親王）が、「女」からの手紙をきっかけに久しぶりに「女」を訪れた場面である。これを読んで、後の設問に答えよ。

　女は、まだに月ながめてゐたるほどに、Ａ人の入り来れば、うちおろしてゐたれば、例のたびごとに目馴れてもあらぬ御姿にて、御などのいたうなえたるしも、をかしう見ゆ。ものものたまはで、ただ御にを置きて、「御の取らで⒜参りにければ」とて、さし出でさせたまへり。女、もの聞こえむにもほど遠くて①びんなければ、扇をさし出でて取りつ。

　Ｂ宮もりなむとおぼしたり。のをかしきなかにかせたまひて、「人は草葉の露なれや」などのたまふ。いと②なまめかし。近う寄らせたまひて、「は⒝まかりなむよ。たれに忍びつるぞと、見あらはさむとてなむ。はと言ひつれば、なからむもあやしと思ひてなむ」とて帰らせたまへば、

　　こころみに雨も降らなむて空行くＣ月の影やとまると

人の言ふほどよりも、あはれにおぼさる。「あが君や」とて、しばしらせたまひて、でさせたまふとて、

　　③あぢきなくの月にさそはれてＤ影こそ出づれ心やは行く

とて、帰らせたまひぬるのち、ありつる御見れば、

　　われゆゑに月をながむと告げつればまことかと見に出でて来にけり

とぞある。「なほいとをかしうもおはしけるかな。Ｅいかで、いとあやしきものに聞こしめしたるを、聞こしめしなほされにしがな」と思ふ。

　宮も、④いふかひなからず、つれづれの慰めにとはおぼすに、ある人々聞こゆるやう、「このごろは、なむいますなる。昼も⒞いますなり」と言へば、また、「もおはすなるは」など、口々聞こゆれば、いとあはあはしうおぼされて、Ｆ久しう御もなし。

（注１）宿―ここでは、和泉式部の邸宅をさす。

（注２）こめきて―子供っぽくて

問１　二重傍線部①～④の語句の意味として最も適切なものを、それぞれの選択肢ア～エの中から一つずつ選べ。

①　「びんなければ」

　ア　よそよそしいので　　イ　不憫に思われるので

　ウ　不都合なので　　　　エ　体調が悪いので

②　「なまめかし」

　ア　清らかである　　　イ　優美である

　ウ　あいにくである　　エ　中途半端である

③　「あぢきなく」

　ア　落胆して　　　イ　取るにもたらぬ身で

　ウ　わけもなく　　エ　思うようにならずに

④　「いふかひなからず」

　ア　つまらぬわけでもなく　　イ　交わす言葉もなく

　ウ　身分にそぐわず　　　　　エ　言ってもしかたがないくらいに

◎問２　傍線部Ａ「人の入り来れば」とあるが、「人」が女に伝えたかった自らの来訪の真の目的はどのようなものか。次のア～エの中から最も適切なものを一つ選べ。

ア　使者が受け取り忘れた女の手紙への返事を、自らの手で届けるため。

イ　自分以外に女のもとに通っている男がいるかどうかを、はっきりとさせるため。

ウ　自分のためにもの思いにふけっているという女の手紙の内容を、自らの目で確かめるため。

エ　自分の手持ちぶさたな思いを、女との会話で紛らわせようと思ったため。

問３　波線部⒜～⒞の敬語の敬意の対象の組み合わせとして最も適切なものを、次のア～カの中から一つ選べ。

ア　⒜　女　　　⒝　宮　　⒞　源少将

イ　⒜　女　　　⒝　女　　⒞　源少将

ウ　⒜　女　　　⒝　女　　⒞　宮

エ　⒜　御使　　⒝　女　　⒞　宮

オ　⒜　御使　　⒝　宮　　⒞　宮

カ　⒜　御使　　⒝　宮　　⒞　源少将

問４　傍線部Ｂ「宮もりなむ」の「なむ」と文法的に同じものとして最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選べ。

ア　はまかりなむよ。

イ　見あらはさむとてなむ。

ウ　なからむもあやしと思ひてなむ。

エ　こころみに雨も降らなむ。

問５　傍線部Ｃ「月の影」は、この歌の中では何を喩えたものか。次のア～エの中から最も適切なものを一つ選べ。

ア　御使　　イ　宮からの手紙　　ウ　敦道親王　　エ　時の流れ

問６　傍線部Ｄ「影こそ出づれ心やは行く」を、「影」がこの歌の中で何を喩えているかが明確になるように、わかりやすく現代語に訳せ。

［

］

問７　傍線部Ｅ「いかで、いとあやしきものに聞こしめしたるを、聞こしめしなほされにしがな」の解釈として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選べ。

ア　たいそうひどい人たちが宮に申し上げた私の噂を、なんとかして打ち消すことはできないものだろうか。

イ　どうして、私のことをたいそうひどい浮気者だと宮に申し上げるのだろうか、どうか宮もお聞き入れにならないでほしい。

ウ　私のことをけしからぬ者だと宮がお聞きおよびになっているのを、どうにかしてただしたいものだ。

エ　どうして私の噂がひどく下品な人たちの耳に入ることがあろうか、いや、決してあるまい。

問８　傍線部Ｆ「久しう御もなし」とあるが、その理由として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選べ。

ア　宮の女房たちが、女のもとに様々な男が通っているという噂を宮に申し上げたことで、女のことをひどく軽薄だと宮がお思いになったため。

イ　女の女房たちが女のもとに通ってくる男たちのことを話している声が、宮に聞こえてしまったことで、たいそうはかない恋であったと宮が感じてしまったため。

ウ　宮が、今宵のやりとりで女のことを言ってもしかたがないくらいつまらない女性だと感じたことで、たいそうはかない恋であったと自覚したため。

エ　女の女房たちが自分の恋人をはしたなく自慢しあっている声が、宮に聞こえてしまったことで、その主人である女も含めてもう逢うまいと宮がお思いになったため。

【解答】

問１　①＝ウ　②＝イ　③＝エ　④＝ア

問２　ウ

問３　イ

問４　ア

問５　ウ

問６　私の身は出て行くけれども、どうして心は出て行きましょうか、いや出て行きはしません。

問７　ウ

問８　ア

【現代語訳】

　女は、端近のところで月を眺めてもの思いに沈んで座っていたところ、（誰か）人が入ってきたので、簾を下ろして座っていると、（宮は）いつものようにお逢いするたびに目新しいお姿で、（お召しの）直衣などで着慣れて柔らかくなっているのまで、心惹かれるように見える。何もおっしゃらないで、ただ扇に手紙を置いて、（宮は）「お使いが受け取らずに（あなたのところへ）帰ってしまいましたので」とおっしゃって、（お供の者にお使いが受け取らなかった手紙を）お差し出させになった。女は、お話を申し上げようにも離れていて不都合なので、（自分の）扇を差し出して（お手紙を）受け取った。

　宮も（女のところへ）あがろうとお思いになった。（庭の）前栽の風情のある中をぶらぶらなさって、「人は草葉の露なれや」などと口ずさまれる。ほんとうに優美である。（宮は女の）そば近くにお寄りになり、「今夜は（これで）帰りましょう。誰のもとに忍んできたものか、見届けようと思って（やって来たのです）。明日は物忌ということですから、（邸に）いないのもおかしいと思いまして」と言ってお帰りになろうとするので、　  
　　　ためしに雨でも降ってほしい。私の家を通り過ぎて行く空行く月のよう

　　な宮様がここにおとどまりくださるかどうかと。

　人がうわさするより子供っぽくて、いじらしいとお思いになる。（宮は）「いとしいあなた」と、少しのあいだ（家に）おあがりになられて、お帰りになられるときに、　　  
　　　（宮中での物忌みのため）思うようにならずに私は空行く月に誘われて

　　私の身は（あなたのもとを）出て行くけれども、どうして心は出て行きま

　　しょうか、いや出て行きはしません。

　とお詠みになって、お帰りになった後に、先ほどの（宮の）お手紙を見ると、  
　　　私のせいで月を眺めてもの思いに沈んでいると私にお知らせになったの

　　で、本当だろうかと見にやって来ました。

　と書いてある。「やはりほんとうにすばらしいお方でいらっしゃるよ。どうにかして、私をひどく素行の悪いけしからぬ女だとお聞きになっているのを、考え直してほしい」と思う。

　宮も、（この女を話し相手として）つまらぬわけでもなく、退屈の慰めに（ちょうどよい）と思われるのに、（お側に）いる女房たちが（宮に）申し上げるには、「最近は、源少将がおいでになるそうです。昼間もおいでになるとか」と言うと、もうひとり（の女房）が、「治部卿もいらっしゃるそうですよ」などと、口々に申し上げるので、（宮は女のことが）ひどく軽薄に思われて、長らく（宮からの）御文もない。